

「あるまじきこと」をめぐって

『狭衣物語』における

池 田 良 子

「少年の春は、惜しめども留まらぬものなりければ」という美文調で始まる『狭衣物語』は、主人公狭衣の恋慕の相手、源氏宮の登場をもって語り出される。源氏宮は、狭衣が一生涯慕い続ける理想の女性として描かれる。そこで、本稿では主人公狭衣と源氏宮の恋について考察したいと思う。

一

いったい源氏宮とはどのような女性なのであろうか。

源氏宮像を考える上で、まず宮についての描写箇所を抜き出し、

(A) 外面的性格(髪・容貌・容姿等)・(B) 内面的性格(性格・才能等)の二面に分類してみた。

源氏宮の描写を見ると、髪・容貌・容姿等の外面的性格に関するものが全体の約八割を占めている。この割合は、多屋久栄氏の論と同様

(注1)

の結果を得た。また、それらの描写箇所は、それぞれの要素を細かく分析し、多くの修飾語を使用した表現となっている。例えば髪

の描写について

御額の髪、ゆらくとこばれかゝり給へる、裾はやがて後と等しう引かれゆきて、裾の削ぎ目、花やかに見え給へるを、いづくを限りに生ひゆかんと、所狭げなるものから、あてになまめかしう見え給に

(注2)

というように、まず額髪を描き、次に長さ、裾の削ぎ目を描く。髪の一つ一つの要素を詳細に描写している。容貌に関しても同様の描き方である。

その上、

(ア)「いとわりなし」と思したる御顔の美しさ、「千夜を一夜にまば

り給とも、飽く世はいつか」と、見給も(4)

(イ)かゝる人の類、又あらんやは。これを起き臥し我が物と見たて

まつらで、世にはなをいかでかあらん(7)

(ウ)宮の御たち、この比ぞさかりにとゝのをらせ給て、「まことにひかるとは、これを言ふにや」と見え給へり。(3)

(エ)三十二相もよく具はり給て、佛の御身をば得給へる」などの給程に(2)

のように、源氏宮は最高美を持つ女性として描かれる(各用例の最後の数字は、類似した用例数を示している)。その他、「めでたし」(2)「類なし」(3)「様殊に見ゆ」(4)などの語が繰り返し用いられるため、表現が固定化してしまっている。

また、内面的性格を表現している箇所が極端に少なく、源氏宮の内面性を読み取ることは難しい。このように、外貌重視の源氏宮像を表現した作者は、源氏宮をあくまで理想化しようとした。外面美を強調したあまりに、現実味のない、読者の手につかみ得ない天上の人物としてしまった感がある。多屋久栄氏の「具体性をもたないことから作者が永遠の女性として、具体化を避けた意図を想像することができ」と述べられたとおりである。しかし、この物語の執筆条件・享受者を考えると、作者と称される六条斎院宣旨が、主人である六条斎院(裸子内親王)をモデルに造型したのが源氏宮だとする通説に従えば、最高美としての表現も致し方ないのかも知れない。そこには長年に亘って斎院に仕えた宣旨の、主人に対する強い愛情を見ることができよう。なお、斎院と宣旨については後で触れることにする。

源氏宮の内面的描写が極端に乏しいと述べたが、次に感情描写に

ついて少し考えてみたい。

狭衣に熱き思いを打ち明けられた源氏宮は、

「物恐ろしき心おはしける人を、またなきものに、思ひ聞えて明暮さし向ひたりけるこそ。さるべき人々に離れて生ひ出でにけるよ」など、始めて物あはれに思ひ續けて……(中略)……

「誰も、知らでかやうに常にあらば、恥しうもあるかな。ありて憂き世は」など、今日ぞ始めて思ひ知られる。

と語られているように驚くとともに自分の不幸な生いたちを嘆きしかなかった。

狭衣が自らの恋心を源氏宮に訴える場面は何度かある。その折折に、源氏宮が狭衣に対して抱く感情は、「恐ろし」「怪し」「ゆゆし」等の語によって表現される。

○涙のほろ／＼とこぼるゝをだに、「怪し」と、おぼすに、御手をとらへて、袖のしがらみ堰きやらぬ氣色なるを、宮、いと恐ろしうなり給て、とらへ給へる腕に、やがて俯し給へるけはひ、「いといみじ。恐ろし」とおぼしたるも……(中略)……「恐ろしう陀し」と、おぼしたるより外の事なきに……

○せきもやらぬ涙に「何故か、いたづらにもなり給はん。いとゝ恐ろしうわりなし」と、思して、うち泣き給へるけわひ……

(中略)……いとゝゆゝしう思し、惑はれて

などがその例である。そこで、多数使用される「恐ろし」という語を取り上げ、その対象物を探ることにする。

「恐ろし」(恐ろしげなり)の用例は、四十五例を数える。それ

らの用例を対象物に関して分類すると、

①自然界に関する事象

(海・雨音・夜・神鳴・霰の音等)

②超自然的事象

(天稚皇子事件・神がかり・出産等)

③人物に関するもの

④その他

に分けられる。そこで③の「人物に関するもの」の「恐ろし」という語が使われる人物を具体的に示すと、威儀師・嵯峨の院(坊主頭)・武者・別当の具・母代そして狭衣となる。人物に対して使用する用例は二十一例あり、全体の半数近くを占めている。そのうち、源氏宮が狭衣に対する感情としての使用が五例、女二宮が狭衣に対する感情としての使用が二例ある。このように見てみると、「恐ろし」の語の対象が、当代きつての貴公子である狭衣を指すことはいささか特異であるといえよう。また用例数が七例を数えるのは大きな割合を占めている。

この点において、作者は何を意図しているのか。その理由を考える上での一つの要因となる語が「あるまじきこと」ではないかと私は考える。

二

理想の女性として描かれている源氏宮であるならば、狭衣が恋慕

するのも当然であろう。しかし、源氏宮に恋心を抱く狭衣の行爲は、物語中では、「あるまじきこと」として描かれるが、真にあってはならないことなのであるうか。物語のはじめに予言的な文章があるので少し長くなるが引用してみると、

さるは、その煙のたゞずまゐ、しらせたてまつらん及びなく、「いかならん便もがな」とおぼし煩ふにはあらず、たゞ双葉より、露の隔てなくて、生ひ立ち給へるに、親達を始めたてまつりて、よそ人も、御門・春宮なども、一つ妹背と思し掟て給へるに、「われは我」と、かゝる心のつき初めて、思ひ侘び、ほめかしても、かひなきものゆへ、あはれに思ひかはし給へるに、『おもはずなる心ありける』と、おぼし疎まれこそせめ。世の人聞き思はん事も、むげに思ひやりなくうたてあるべし。大殿・母宮なども、ならびなき御心ざしとは言ひながら、『この御事はいかゞはせん。さらばさてもあれかし』とは、よに思さじ。何方につけても、いかばかり思し嘆かん、かた／＼にあるまじき事』と、ふかく思ひ知り給ひにしも、あやにくぞ心の中は碎け優りつゝ、『終に身をいかにし果てん』と心細う思さるべし。今日始めたる事(に)はあらねど、なをさらでもありぬべきことは、よろづに勝れ給つらん女の御あたりにほまことの御兄ならざらん男は、むつまじくもてなさせ給まじかりけれ。早うは、仲澄の侍従・宰相中將などの例どももなくやは。ましてこれはことほりぞかし。

のごとくである。

源氏宮は、故先帝の晩年に誕生した女宮であった。女宮三歳の時、父帝・母の御息所とも死去。そのため故先帝の妹宮であった堀川の上（狭衣の母）が源氏宮を引き取り養育された。狭衣とは従兄妹同志であって、幼少の頃から一緒に育てられた事実が、二人の関係を「あるまじきこと」としてしまった最大の原因だと考えられる。狭衣が思いを遂げられないのは、囲りの人びとが「ひとつ妹背」と決めているのが問題だという。

狭衣が源氏宮を恋慕している事実を周囲の人達は知らないのだろうか。源氏宮の入内を願う東宮の言葉に、

「世とともに、物嘆かしげなる氣色こそ、心得られぬ。何事のさはあるべき。いみじからんかぐや姫なりとも、その思はんことは避るべきやうなし。仲澄の侍従の眞似するなめり。人もさぞ言ふなる。おとゞも、かゝれば思ひ嘆きて、つれなきなめり」

とある。東宮に『宇津保物語』の同腹の妹（あて宮）に恋する仲澄と同じだと指摘される。すると、狭衣は「人の問ふまでになりけり」と心苦しく思ひ、言い訳をする。

また、作者自身も、狭衣の源氏宮への恋心は致し方ないとしている箇所がいくつかある。予言的文章として前掲した物語初めの部分の他に、

①十四五にならせ給ふ御かたちの、ほの見たてまつりけん人は、いかならん武士なりとも、やはらぐ心は必ずつきぬべきを、中将の御心もちとはよりぞかし。

②「あながちなるさまにて、近ふ見たてまつらん」と思さば、「端山の繁り」だに難かるべきならねば、何の障りはあらんとする。されど、親達の思さん事のうたてあるを思しつゝ、心のまゝにも亂れ給はぬまゝに、さすがに、「こはあるまじきこと」と、心ながらことわられ、心一つに忍び過し給ふ。

があり、特に②では思いが強ければ端山の繁った中を分け入ることすら困難ではないであろう。狭衣が源氏宮と契ろうとすれば何の障害もないとまで言い切っている。このように作者自身も止むを得ない恋とする。では「あるまじきこと」としななければならない訳があるのだろうか。

### 三

『狭衣物語』に用いられている「あるまじきこと」の用例数は三十七例ある。それらを分類すると、次のごとくである。

- |                   |     |
|-------------------|-----|
| ①狭衣と源氏宮との恋を指すもの   | 七例  |
| ②女二宮の狭衣への降嫁を指すもの  | 三例  |
| ③一品宮の狭衣への降嫁を指すもの  | 二例  |
| ④出家に関する事象を指すもの    | 三例  |
| ⑤皇位・宮位に関する事象を指すもの | 七例  |
| ⑥その他              | 十五例 |
- 右の分類からわかるごとく、この物語の中核をなす狭衣と源氏宮

の恋を「あるまじきこと」としている用例は七例にものぼるのである。今、その七例を示すと、

- (1)「何人ならん、見知りたりけるにや」とは、おぼせど、かやうのうちつけ懸想などは、御心にもとまらず、たゞ、あるまじき事のみぞ、いかなるにか、御身苦しう思し焦るめる。
- (2)何方につけても、いかばかり思し嘆かん。かた／＼にあるまじき事と、ふかく思ひ知り給ひにしも、あやにくぞ心の中は碎け優りつゝ、「終に身をいかにし果てん」と、心細う思さるべし。
- (3)聞き臥し給て、「など、かくしも思すらん。いと、かゝる御心さしどもを知らず顔に、あるまじき事によりて、身をばいかにしなしてんとすらん」と、人やりならず枕も浮きぬべし。「あるまじき事」とのみ、かえす／＼思ふにしも、明暮さし向ひ聞えながら、
- (4)……『あるまじき事』とは、深く思ひながらも、我も世の常に思ひ定めて、よそのものに見なしたてまつりてはやまじ……(略)……」など、おぼすに
- (5)されど、親達の思さん事のうたてあるを思しつゝ、心のまゝにも亂れ給はぬまゝに、さすがに、「こはあるまじきこと」と、心ながらことわられ、心一つに忍び過し給ふ。
- (6)「今日、明日」と、思立ちたる心のうちは、「いとゞあるまじき事」と、思ひ離れ給へど、それにつけても、さしも、猶安からず思え給。

となり、まず気付くことは、二人の恋を「あるまじきこと」としているのは、親でもなく帝・東宮でもない。狭衣自身だということである。用例の多くが、狭衣の心内語の中で使用されていて、狭衣だけが、「あるまじきこと」と促え、あくまで「成就し得ない恋」だと限定してしまっていることである。鈴木一雄氏も

いかに兄妹のように親しく、幼くより共に育てられたにしても、従兄妹に恋すること自体はそれほどの非難を浴びる「あるまじきこと」なのであろうか。

狭衣自身もろもろの理由を挙げてはいる。源氏の宮は兄として自分に親しみ、異性として受け入れる心がないだろう、両親をはじめすべての人が二人を兄妹として扱っている。東宮も彼女に思し召しがあり、両親も彼女の東宮妃を望んでいる、等々。しかし、納得できる説明は物語のどこにも見当たらない。……(中略)……しかし、物語のそもそもの始まりから、二人の仲を絶望視する理由は物語の内部では微弱である。

と述べておられるとおりである。

源氏宮と狭衣の關係に類似した人物として『源氏物語』の夕霧と雲居雁の二人を挙げることができる。従兄妹同志が、同じ邸内で兄妹のように養育された。そのことによって恋心は自然に生まれ得るものである。この二人もそうであるけれども、『源氏物語』はこの二人の恋を「あるまじきこと」とは記していない。雲居雁の親達の反対理由は、東宮に娘を出させようと願っていたのに夕霧に邪魔をされた。まして六位の身分の低い者ということである。この

ように『源氏物語』では、理由の究明ができる。しかし、狭衣と源氏宮の場合は、誰もが「ひとつ妹背」だと思っているからだめだという狭衣の倫理観によるところが大きい。

何故、『狭衣物語』では二人の関係を「あるまじきこと」とこたわるのか。それは、やはり作者の出仕先が齋院サロンだという特殊性に起因するのではないだろうか。「あるまじきこと」の他に用例を見ると、その特殊性の一端をつかむことができる。

前述した用例分類の中で、②女二宮の狭衣への降嫁を指すものが三例、③一品宮の狭衣への降嫁を指すものが二例見えた。つまり、皇女が降嫁することが「あるまじきこと」とんでもないことだとしている。これは、皇女は結婚すべきではないとの考え方の強い表れである。

左大將の、この世にあまりて、なべてならぬ有様なるを、うへの、『行末の後身にも』との給はするをだに、宮達はたゞ何となくて過し給こそ、世の常の事なれ。『行末のため』となをなをしく定まり給とも、さばかり思ひよらぬ限なかなる心の程には、至らぬ限なき心ばへをや、見給はん」と、めざましう、心憂かるべければ、「見たてまつらん」とこそ、思ひ聞ゆるに、右は女二宮の母、大宮の言葉である。この考えは、『源氏物語』の女三の宮の降嫁や落葉の宮の大宮の言葉等にも見られる。『狭衣物語』には、主な登場人物として、源氏宮・女一宮・一品宮・故式部卿の姫君（宰相中将の妹）という皇女が多数登場する。皇女以外の主な人物としては、師平中納言の娘、すなわち飛鳥井の姫君がい

る。この五人の中で、狭衣との関係を「あるまじきこと」としてとらえられていない女性性は、飛鳥井の姫君と宰相中将の妹の二人である。飛鳥井の姫君は皇女ではなく狭衣が結婚するのに何の憚りもない。では、皇女である宰相中将の妹との関係を「あるまじきこと」ととらえていないのはどうしてであろうか。宰相中将の妹は、最初から狭衣の結婚相手として造型された人物であった。永遠に手が届かない存在である源氏宮の「形代」として神が作られたとされるのが宰相中将の妹である。彼女も、源氏宮同様、外面的性格に重点を置いて描かれた女性である。異なるのは、源氏宮のように一つ一つの要素を詳細に描写する姿勢は弱くなり、かつ、描写箇所には多くの場合、「齋院にぞいみじう似たてまつり給へりける」・「たゞ、『それか』とまで思出られさせ給」・「御有様に、劣り給まじかりけり」という描写が付随しているが、所詮「形代」の域を出ない。源氏宮のモデルと考えられる六条齋院の結婚を否定しながら、物語上での結婚の夢を実現させたのであろう。そのため、狭衣と宰相中将の妹の関係を「あるまじきこと」とはしていないのである。なお、その他の皇女との関係はすべて、「あるまじきこと」としている。この点についても、作者が皇女に対して特別の思いを持っていることが明らかにになる。

『源氏物語』中に見える「あるまじきこと」の用例を見ると、用例数は四十二例にのぼった。しかし、『狭衣物語』のように、皇女の降嫁・皇女との恋に関する使用は皆無である。「あるまじきこと」とされる関係の人物名をあげると、源氏と臘月夜尚侍・六条御息所・

藤壺・空蟬、そして、柏木と女三宮、夕霧と落葉の宮、薫と中君・女一宮・浮舟、匂宮と浮舟などである。『源氏物語』での用例の特徴は、その多くが人妻に対する恋や逢瀬を「あるまじきこと」としている点である。例えば、朧月夜尚侍は未婚だが東宮の后がねとして決まっている女性であり、藤壺・空蟬・六条御息所は入内・結婚している。女三宮もこの時点では源氏の妻であり、落葉の宮も柏木と死別しているものの人妻である。例えば、山口博氏が『王朝貴族物語』<sup>(注6)</sup>の中で、

古代は一夫多妻という安易な把握から、『源氏物語』もまた、まったくルールなしの男女間と考える。源氏と人妻との情事は、安易に行われたように思ってしまう。

しかし、それは大きな誤りである。開放的生活であったとはいえ、人妻との情事は、「姦通」または「不倫」という忌まわしい文字での表現が当たる行為であり、彼らは罪の意識にのいたのである。作者は「姦通」とか「不倫」とかの言葉を使っているではないが、源氏と藤壺宮との姦通を、「あさましかりし事」と表現するのである。

と述べられているごとく、『源氏物語』では人妻との関係が「あるまじきこと」なのである。それは、『狭衣物語』において、未婚の皇女に使用されている場合と対象的である。

#### 四

既に述べたように、『狭衣物語』の特徴は、その執筆が斎院サロンという特殊な場所で行われたという点にあると思う。また、主人である祿子内親王は、後朱雀院の第四皇女として生まれるが、生後九日目で母を失い、七才で父とも死別する。幼くして（八歳）斎院に卜定。十三年間務めた後、病氣により退下。その後、三十八年間に六条斎院サロンで過ごすことになる。生来病弱であったため、彼女は結婚もせず独身のまま生涯を終えた。「明暮御心地を悩ませ給て、果は御心もたがはせ給て」と語られているように、精神的にも異常であったようだ。このような運命を背負った斎院に卜定当時から宣旨としてお仕えた作者は、四十数年間を斎院とともに過ごしたのである。そんな中で『狭衣物語』は誕生した。祿子内親王をモデルに祿子内親王のために書かれた物語なのである。作者は皇女として一生を終えることを肯定し、斎院を慰めることが目的で物語を創作したのだらう。

『狭衣物語』は、前述の外的な執筆環境が特殊だったために多くの制約を受けることとなった。その制約がそのまま物語中の人物まで束縛してしまった。それが、「あるまじきこと」という語によって表現されていると思う。

祿子内親王に関して、『栄花物語』は、

稚くおはしませど、哥をめでたく詠ませ給。候ふ人／＼も題を

出し哥合をし、朝夕に心をやりて過させ給。物語合とて今新しく作りて、左右方わきて、廿人合などせさせ給て、いとをかしかりけり（けぶりの後・日本古典文学大系）

と語るように『裸子内親王家歌合』が他の後宮関係の歌合開催数よりはるかに多かったようである。また、古澤淑子氏<sup>注7</sup>によると、歌合の構成メンバーの特徴は、他の歌合が有名歌人中心の構成であるのに対して、『裸子内親王家歌合』は、ほとんどが齋院所属の女房で、とりわけ日常的に裸子の側で奉仕していた女房達であること。例えば、出羽弁は彰子・章子サロンに出任している時には作歌活動が活発であったが、裸子サロンへの出仕後は、他の歌合には出なかったであろうかと述べられている。その中でも主旨は、他の後宮の歌合には参加せず、『裸子内親王家歌合』にのみ出詠していたようである。それゆえに古澤氏が「特に病弱な裸子にとって触れることのできる世界は狭かったろう」とも推測されているように、健康面から、加えて齋院サロンという特殊性から裸子内親王及びそのサロンの女房達の生活範囲もまた狭められていったのだと思われる。そんな状況の中で生まれた『狭衣物語』の世界も外的条件からの制約は、当然受けなければならなかった。作者は、女主人公の源氏宮を裸子内親王にモデルを求めたために、どうしても結婚させることはできなかった。結婚することによって悩みや苦しみが多多く生じて来よう。だから同じ皇女である女二宮・一品宮の降嫁に対しても否定するしかなかった。断固として、『あるまじきこと』でなければならなかったのである。

ところで、『本朝世紀』（康和五年三月十二日）に  
天喜五年九月偷降<sup>注8</sup>嫁<sup>注9</sup> 参議左近中将源俊房卿。世以爲不可。

と見え、『栄花物語』（けぶりの後）には、  
さて忍びて迎へ奉らせ給てければ、内・東宮いと便なきものにおぼしめしたる中にも、春宮は一つ御腹におはしまして、心やましく、めざましくめざましうおぼしめして、内にも、「一人かくのみ思ひ侍るべき事にもあらず」と、いみじく申させ給へば

と見えるごとく、一〇五七年、後朱雀天皇の第二皇女で前齋院の皇子内親王と中納言源俊房の密通事件があったのは周知のところである。この事実も皇女の降嫁を「あるまじきこと」と主張しなければならぬ因となったのではないかと考えるのは、あながち早計でもあるまい。

（注1）『狭衣物語』における女性の描写について―語彙的観点から―（樟蔭国文学17、昭54）

（注2）『狭衣物語』の本文の引用は、日本古典文学大系（岩波書店）を用いた。

（注3）『物語文学を歩く』（有精堂・二二〇頁）

（注4）『源氏物語』（若菜上）の女二宮の婿選びについて、朱雀院の言葉として、「皇女たちの世づきたるありさまは、うたてあはあはしきやうにもあり、また高き際といへども、



女は男に見ゆるにつけてこそ、くやしげなることも、めざましき思ひもおのづからうちまじるわざなめれと、かつは心苦しく思ひ乱るるを」(新潮日本古典集成)とある。

(注5)

『源氏物語』(夕霧)の落葉の宮の母の言葉として、「ただ人だに、すこしよろしくなりぬる女の、人二人と見る例は心憂くあはつけきわざなるを、ましてかかる御身には、さばかりおぼろけにて、人の近づききこゆべきにもあらぬを」「かくよろづにおぼしいとなむを、げにこのかたにとりて思たまふには、かならずしもおはしますまじき御ありさまなれど」等がある。

(注6)

『王朝貴族物語―古代エリートの日常生活』(二〇一頁)

(注7)

「裸子内親王家歌合の特色」(平安文学研究59、昭53)